

30代教師の転

起

きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！



常に目の前の生徒を見つめ 読解力を育成する授業づくりにも努める

福岡県立宗像高校

青柳孝明先生 39歳

私が乗り越えてきたもの

「自分の授業」とは何か

「カリキュラム通りに授業を進めるだけで精いっぱい。これが、宗像高校に赴任した当初の私の正直な気持ちでした。指導に自信がないため、黒板や教科書ばかりに目がいき、生徒の表情を見られずに授業をしていました。解説や間の取り方などを工夫したくても、生徒の様子を見ていない私には、どう改善すべきかも分からなかったのです。そんな指導では生徒の学力を伸ばせるはずもなく、私の担当するクラスは成績が低迷していききました。

「教師の責任を果たしたい」という思いから、先輩の授業を見学しました。

厳しく指導しながらも生徒を笑わせる先生、国語の奥深さを感じさせるほど解説が緻密な先生など、どの先生も自身のキャラクターを生かした授業をされていることが分かりました。私も自分の個性を授業に生かそうと思いましたが、そのためには、まず自分がどのような授業を目指すかを固める必要があると気付いたのです。

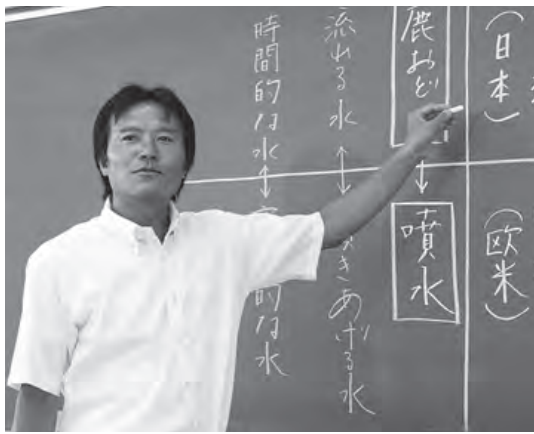
入試問題の分析不足を痛感

自分の教師としての理想を考えた結果、多様な日本語表現に触れる楽しさを感じられる授業を行い、生徒にとつ

「自校の生徒のための解説」が出来なかった

て人生の励みとなるような言葉一つでも心に残してやることだと思に至りました。そこで、助詞や接続詞の使い方など国語の基礎を丁寧に教え、文章をしっかりと読み取れるよう指導したのです。徐々に、生徒を授業に引き込めるようになり、成績も持ち直しました。

ところが赴任5年目、30歳で初めて3年生を担当し、再び壁に直面します。日々の授業づくりにも集中するあまり、大学入試問題の分析が不十分だったため、過去問演習で生徒の目線に立てず、市販の問題集と大差ない解説しか出来なかったのです。質問はほとんどなく、「授業でわざわざ説明されなくても、一人で出来る」という、生徒の無言のメッセージのように感じられました。



あおやぎ・たかあき ◎教職歴・同校赴任歴共に13年。担当教科は国語。1学年主任。
福岡県立宗像高校 ◎全日制／普通科／共学。11年度入試では、国公立大は、北海道大、筑波大、大阪大、京都大、九州大などに計223人が合格。私立大は、立教大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ470人が合格。

そして、これからも挑み続ける目標

多角的な解説を目指して

指導力不足を痛感した私は、国公立大、私立大を問わず多くの入試問題の分析に取り組み、解説の仕方を工夫しました。「多角的に解説できなければ、生徒たちの求めに応えられない」と必死でした。その成果は、やがて生徒の反応に表れました。授業中の質問が増え、より適切な答えを求める熱意が生まれてきたのです。「この文意の解釈でつまづくのではないかと」、自校の生徒の目線に立って予測しながら解説することによって、納得感を得られたからだと思います。

また入試問題研究を通して、3年次

までどの程度の読解力を付けておく必要があるかも見えてきたため、逆算して1・2年次の指導を見直しました。文章構造を的確に把握できるよう、対比表現や比喩、起承転結などの分析に時間を掛けるようになったのです。

赴任から10年ほど経ち、その間に何回か学年を持ち上がる過程で、生徒の国語力の変化にも気付きました。ふさわしい接続詞を選べなかったり、簡単な漢字を間違えたりする生徒が目立ち、古文の現代語訳を示しても、使われている現代語の意味が分からないという生徒が増えているのです。そうした生徒たちを前にして、基礎から念入りに教えることの重要性を改めて感じ

ました。文章の前後関係、単語や漢字の意味をまず質問し、生徒の理解度を確かめた上で解説をすることを心掛けるようになりました。

生徒の内面を豊かにしたい

生徒が変われば、求められる授業も変わります。教師には、目の前の生徒の力を伸ばす使命がある。その思いはますます強くなっています。最近には特に、国語への苦手意識を持つ生徒が増えていくと感じます。論理的に読み解く訓練をする前から、「国語の勉強にはセンスが必要」などと言って諦めてしまっている生徒もいます。

文章をしっかり読み解いてこそ、多様な表現力が身に付きますし、文章を

全ての教科の基盤である読解力をいかに育むか

通して人生の様々な局面を疑似体験することも出来るのです。国語という教科の持つそうした魅力を少しでも多くの生徒に伝えたい。そこで、赴任14年目の2011年度は従来の指導に加え、筆者の主張を考えさせる時間を増やしています。生徒それぞれが自分の答えを探しながら文章を追うことで、筆者の心理や課題意識をより深く捉え、生徒の内面を豊かに出来ればと考えています。

また、国語の読解力は全教科の基盤となります。不足すれば他教科の理解にも影響し、どの教科も学力が伸び悩む結果になりかねません。常に目の前の生徒を見つめ、いかに読解力を伸ばすかを追究していきたいと思えます。

青柳先生 の 授業実践



Q&A

Q 文章の要旨を的確に把握し、自分の言葉で表現する力を付けるために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 授業で扱った文章を400字詰め原稿用紙1枚に要約させています。要約は、その文章を扱う最後の授業の約15分を使って、1年次から3年次まで全学年で行います。

また、採点のポイントをまとめたプリントを配付し、生徒はそれを参考に互いの要約を添削・採点します。友だちの要約を読むことで、「こういう表現もあったのか」と気付くことも多いため効果的です。更に、記述内容が同じでも表現によってニュアンスが微妙に異なることを知る機会にもなると考えています。

Q 大学入試では課題文が長いので、文章を速く読む力が求められます。その力を養うために授業でどのような工夫をしていますか？

A 1・2年次の授業の2回に1回、冒頭5分間を使って、速読の練習をしています。入試問題から取った3000~4000字の課題文をプリントにして生徒に配付し、時間内に出来るだけ多く繰り返し黙読させています。個人差はあるものの、2年間続けることで、読むスピードは着実に上がっていくと実感しています。

1年次は読むことに集中させますが、2年次にはプリントに1題、入試で問われた選択問題を載せています。受験に対する意識を高め、漠然と読むのではなく、設問に沿って読解させる狙いがあります。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す青柳孝明先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、青柳先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp